Meisei University

『伊勢物語』成立私考　第三稿

――みやびとは異質な『平仲物語』の世界――

井上英明*

はじめに

本稿にかかげた表題は「『伊勢物語』成立私考――「みやび」とは異質な『平仲物語』の世界――」と言うが、内容的には前稿「『伊勢物語』成立私考　第二稿――紀貫之との距離――」（「明星大学研究紀要」〔日本文化学科・言語文化学科〕第七号）に直接つづくもので、今回数えて第三稿となる。前稿の未熟な論旨に対しては、主に私信を通してコメントを寄せてくださった方々がいる。その厚意に応える意味で、わたしとしてはおよそ専門家においてはなくもがなと思われた前稿の補足をいくつか左に注して本論に入りたい。

㈠『古今和歌集』撰者が藤原氏以外の微官たることは周知のことだが、友則（正六位）、貫之・躬恒（正八位）、壬生忠岑に至っては衛門府四等官のさらに下位に降る薄官であった。こうした事実は勅を発した醍醐天皇の政治的バランス感覚というより、遠く『記』・『紀』・『歌謡』・『万葉集』以来、歌を詠む行為においては貴賤の等差無く、男女の区別無く、賢愚の高下無き和歌文学の精髄が、後に「歌徳」としての「みやび」とか「あはれ」という至善の心情的価値を形成したものである。歌人としての貫之の境遇とその周辺については、つとに松田武夫氏に論及がある。（「歌人としての貫之―貫之の回顧―」）（『日本歌人講座』2―「中古の歌人」―）「前稿」三頁当該箇所参看。

㈡藤原兼輔と紀貫之との関係で、特にその史的事実の究明には、目崎徳衛氏『紀貫之』（吉川弘文館人物叢書）が細部においては異論が無くもないが、周到だと思われる。『貫之集』（他撰本、萩谷朴氏校訂、朝日古典全書版『貫之全歌集』）における藤原兼輔と紀貫之との交情はつぎのようである。

京極の宰相の中将のみもとに老いぬるよしを歎きて

降りそめて友待つ雪はぬば玉のわが黒髪のかはるなりけり

返し　　兼輔朝臣

黒髪の色ふりかはる白雪の待ち出づる友はうとくぞありける

また、返し

黒髪の雪とのなかの憂き見れば友鏡をもつらしとぞ思ふ

猶、右の贈答歌に対応するものとして『中納言兼輔集』（桂宮本叢書本）に、兼輔の立場からほぼ同内容の歌群があり、右の贈答歌と考え合

* 言語文化学科　教授　日本古典文学

NII-Electronic Library Service

Meisei University

わせれば両人の心情は手にとるように判然とする。（「前稿」四―五頁当該箇所参看）

㈢『土佐日記』の文体については国語学者を中心に、すでに多くの論考がある。学説のプライオリティを重んじて順次列挙すると、まず、筑島裕氏「土佐日記と漢文訓読」（中田氏校注『土佐日記』付録、昭和二十二・十二）、遠藤喜基氏「貫之の文体と表現意識――土佐日記の文章を通して――」（京都大学文学部五十周年記念論集昭和三十一・十一）、今井卓爾氏『平安時代日記文学の研究』第三章5日記文学の漢文学――（昭和三十二・十）、川口久雄氏『平安朝漢文学史の研究』上・第十三章「古今集・土佐日記の成立とその漢文学的背景」（昭和三十四・九）等が先駆的で、しかも最も詳細な論考である。右の諸先学によって書かれた論文の特色は、いずれも『土佐日記』の漢文的な発想・表現を実証的に検討した価値あるものである。中でも川口氏は『土佐日記』中、「後の源氏物語など、女性の手になった文学作品に原則としてあらわれてこない特殊用語」を動詞、形容詞、副詞、助動詞、接続詞に分類して――この方法は期せずして遠藤氏『前掲論文』を補充したかたちとなっているが、――『土佐日記』の一部、例えば「十二月廿二日」・「廿六日」・「廿七日」などの各条を真名文に訳しかえる試みを行い、『土佐日記』の文体に漢文脈の響音を克明に論じているが、だからと言って『土佐日記』が初めから漢文だったと極論するのは失当である。この『日記』はあくまで国文の体である。土佐から京都への紀行文の中に展開する各場面での語戯・諧謔の修辞的技巧の妙は、『竹取物語』以来のかな文の発想でなければ達成できないからである。

『伊勢物語』における漢文訓読語の例はきわめて寡なく、「ある人のいはく」（第九段）、「もはらあひごともえせで」（第六十九段）、「本意のごとくあひたりけり」（第二十三段）、「近くはいまだ仕うまつらず」（第七十八段）、「いはむや歌はよまざりければ」（第百七段）などがそれである。その他、漢文特有の対句的表現など若干あるが、詳しくはこれまたこの方面での先駆的な業績で、今日に価値を失わない伴久美氏「伊勢物語の語法」（「解釈と鑑賞」昭和三十一・十一）、宮坂和江氏「竹取・伊勢の文章美」（『日本古典鑑賞講座』第五巻）などがここで想起される。

結論的に言えば、『土佐日記』は漢文脈の簡潔な記録体の文章で、一体に概念的、理知的であり、一方の『伊勢物語』は同じくコロコロ、バラバラ、珠を連ね、簡切の粋をきわめたものであるけれども、全篇の情緒はすべて「和歌」に収斂されていく「語り」の形式をとるが、やはり視読的要素がつよい。短文の結びを「けり」で統一し、喚情的でコノティションに富む文体であることから、両者はすこぶる異質のもので、到底同一作者のものとは思われない。さまざまに文体を使い分ける近代作家の方法を、こうした貴族社会のサロン的読者に囲まれた一種の氏族（クラン）的共同体の中の「作者」に、そのまま適用することは至難の業である。

「前稿」の末尾で、仮説の「原伊勢物語」の方法、文体、内容は『平仲物語』や『伊勢集』などとは次元を異にすると言ったが、以上を「前稿」の補説として、これから本論となるはずの『平仲物語』の検討に入ろう。

㈠

先ず、先学によって明らかにされている既知の事例を整理すると、つぎのようになる。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

『平仲物語』は異称として『平仲日記』（『本朝書籍目録』仮名部）・『貞文日記』（『河海抄』「夕顔」・「槇柱」）とあり、題号に統一を見ないこと、平安朝初期・中期の物語・日記と類を同じくする。『河海抄』所引二箇所の文は現存『平仲物語』（静嘉堂文庫蔵本）の第二十五段、第二十六段（『朝日古典全書』本の段序による）のそれに各々一致するので（「かくのみそ」―「かくのみを」「かの」―「この」の小異はある）――大体において同一本文を伝えるものとみてよいだろう。まずこのことが異本の数量および結尾の第三十九段を除けば、全篇は「男」なる主人公によって統一され、三十八個の話柄は、おおよそ寛平（八八九―八九七）から昌泰（八九八―九〇〇）を経て延喜（九〇一―九二二）にかけての主人公の実体験を素材としており、かつそれは平貞文自身の所業を指すように描かれている。後者は「昔男」にかかわりのない話柄もかなりあり、前者の実録性とは際立った対照をなすことが一読ただちに看取される。

ただしい『伊勢物語』とは、作品としての来歴を決定的に異にする点である。一般に表題は一部の惣標と言われるように、書物の表題は、もとよりその書物が示さんとする内容を表わすものだろう。そうだとすれば平安朝前期の和歌を中心とする叙情的散文には、およそ近代的なジャンルの概念をそのまま適用することにも問題が残るように思われる。

一方、かさねて『河海抄』は例の「平仲墨ぬり譚」を引くが（『源氏物語』「若紫」・「末摘花」）、この気の毒な滑稽譚は『宇治大納言物語』からの引抄で、「大和物語にもこのことあり」と注記するのみで、前掲二箇所を有する「貞文日記」に触れるところがない。日加田さくを氏は――『河海抄』著者所見の「貞文日記」なるものは、現存静喜堂文庫所蔵の『平仲物語』がそうであるように、「平仲墨ぬり譚」を持たなかったものと想像して差しつかえないのではあるまいか（『平仲物語論』参看）とされ、「貞文日記」と現存本『平仲物語』が同一物なる証と考えられている。現存本『平仲物語』の成立は巻末の後人の補記と推される箇所の記述をもって、遅くとも天徳三年（九五九）乃至康保二年（九六五）とされているが、この巻末（『朝日古典全書』本で第三十九段）を除けば、成立期をさらに昔代に措くことが可能となる。

そこで『平仲物語』と『伊勢物語』とを現行本で比較すると、前者は

『平仲物語』は異称として『平仲日記』（『本朝書籍目録』仮名部）・『貞文日記』（『河海抄』「夕顔」・「槇柱」）とあり、題号に統一を見ないこと、平安朝初期・中期の物語・日記と類を同じくする。『河海抄』所引二箇所の文は現存『平仲物語』（静嘉堂文庫蔵本）の第二十五段、第二十六段（『朝日古典全書』本の段序による）のそれに各々一致するので（「かくのみそ」―「かくのみを」「かの」―「この」の小異はある）――大体において同一本文を伝えるものとみてよいだろう。まずこのことが異本の数量および

ただしい『伊勢物語』とは、作品としての来歴を決定的に異にする点である。一般に表題は一部の惣標と言われるように、書物の表題は、もとよりその書物が示さんとする内容を表わすものだろう。そうだとすれば平安朝前期の和歌を中心とする叙情的散文には、およそ近代的なジャンルの概念をそのまま適用することにも問題が残るように思われる。

一方、かさねて『河海抄』は例の「平仲墨ぬり譚」を引くが（『源氏物語』「若紫」・「末摘花」）、この気の毒な滑稽譚は『宇治大納言物語』からの引抄で、「大和物語にもこのことあり」と注記するのみで、前掲二箇所を有する「貞文日記」に触れるところがない。日加田さくを氏は――『河海抄』著者所見の「貞文日記」なるものは、現存静喜堂文庫所蔵の『平仲物語』がそうであるように、「平仲墨ぬり譚」を持たなかったものと想像して差しつかえないのではあるまいか（『平仲物語論』参看）とされ、「貞文日記」と現存本『平仲物語』が同一物なる証と考えられている。現存本『平仲物語』の成立は巻末の後人の補記と推される箇所の記述をもって、遅くとも天徳三年（九五九）乃至康保二年（九六五）とされているが、この巻末（『朝日古典全書』本で第三十九段）を除けば、成立期をさらに昔代に措くことが可能となる。

そこで『平仲物語』と『伊勢物語』とを現行本で比較すると、前者は

結尾の第三十九段を除けば、全篇は「男」なる主人公によって統一され、三十八個の話柄は、おおよそ寛平（八八九―八九七）から昌泰（八九八―九〇〇）を経て延喜（九〇一―九二二）にかけての主人公の実体験を素材としており、かつそれは平貞文自身の所業を指すように描かれている。後者は「昔男」にかかわりのない話柄もかなりあり、前者の実録性とは際立った対照をなすことが一読ただちに看取される。

『平仲物語』が内容と形式において『伊勢物語』にくらべ、純粋度が高いということは、それを文献・書誌学的にいえば、その原本、たとえば「平貞文集」とでも称すべきものから、この『平仲物語』成立までの経路が直接的（ダイレクト）で、複数の読者による書写校合の際の加筆削除といった迂余曲折が少なく、ある程度一回的に成立したことを暗示する。『平仲物語』が『伊勢物語』と初めから撰を異にする所以である。

(二)

平貞（定）文が卒したのは延長元年（九二三）九月二十七日（『古今和歌集目録』）である。この時から仮りに現存本成立の天徳朝（九五七―九六〇）――すなわち、「原平仲日記」または「自撰貞文集」から、現行『平仲物語』に、ほぼ完全な転生をみせたのは、その間の約三十七年である。さらに九年ほどこの間を短縮してみると、天歴五年（九五一）は第二番目の勅撰集『後撰和歌集』の編修が行なわれ、『大和物語』の原型が成ったのもこの年だといわれる（『本朝文粋』『源順集』『栄華物語』『八雲御抄』）。『平仲物語』の成立に『後撰和歌集』と『大和物語』が関連資料として浮び上るのは、他に資料が寡少である故に当然の成り行きであろう。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

そこで、『後撰和歌集』・『大和物語』・『平仲物語』三書における平貞文とのかかわりを吟味してみたくなるのも当然の帰趨であろう。今、そのかかわりのありようを観察すると、『大和物語』と『平仲物語』とが内容を共有するのは、㈠第四十六段と第九段、㈡第百三段と第三十八段であり、『大和物語』の第六十四段、第百二十四段の話柄は共にこれを現行の『平仲物語』に見ない。そうすれば、㈠と㈡は各々『平仲物語』から『大和物語』へと直接の親子関係が考えられるかというと、一概にそうもいかない。というのも『大和物語』は『平仲物語』の内容と形態を無視しているかのごとく読まれるからである。殊に『大和物語』の第百二十四段は『平仲物語』には見当らず、『後撰集』に出て来る話柄で、しかもその内容自体が異なっている。『大和物語』第百二十四段はつぎのような内容である。

本院の北の方のまだ師大納言の妻にていまそかりける折に、平仲がよみて聞えける。

春の野にみどりにはへるさねかづらわが君ざねとたのむはいかにぞ

といへりけり。かくいひいひてあひ契ることありけり。そののち左の大臣の北の方にてのゝしりたまひける時、よみておこせたりる、

ゆくすゑの宿世もしらずわがむかしちぎりしことはおもほゆや君

となむいへりける。その返し、よりまへまへもうたは、いとおほかれど、え聞かず

右の一文から察するかぎり、本院の北の方が大納言国経の妻であった期間に、平仲が艶書を贈り、北の方が藤原時平の妻になってからも昔恋に執する恋歌をふたたびとどけたことがわかる。さらに語り手の注記とおぼしき文末の一節から、本院の北の方の平仲への返歌、それより「まへ」の歌は多かったのだが、「え聞かず」という結尾の文で――これをふたたび目加田さくを氏は『大和物語』の作者が、「口承の噂話を聞知した限りを書きしるしたのであって平仲物語（平仲日記）ないし自筆家集も見ていない」（『前掲書』参看）と解釈されている。古語で「きく」といえば文字通り「人から聞く、伝え聞く」の意にとる他ないが、他に「承知する、判断する、語句の意味を理解する」等々、「きく」の意味の範囲は広いので、この動詞のみで『平仲物語』や「貞文集」（？）との書承関係、聴き語りとの関連を即刻否定し去るのも慎重を期すべきだろう。

だが、『後撰和歌集』の方を見ると、この歌は「恋」三、（七一一―七一二番）に存するが、詞書は『大和物語』よりも詳しく、しかも時平の官名は贈太政大臣と記され、時平の妻となった本院の侍従の子の腕にむかしの恋の執怨を書きつけるといった深恨ただならぬものがある。七一一番の平貞文の歌、及び七一二番の返歌は勅撰の『後撰和歌集』では実名をはばかったのか、「よみ人しらず」とあり、『大和物語』とは断然内容を異にしている。『大和物語』と『平仲物語』は書承関係はおろか、歌がたりとしても同根とは言いがたい。

あえて『後撰和歌集』と『平仲物語』の共有関係を示す典型ともいうべき例を挙げると、つぎのようなものである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

『後撰集』恋一

題しらず　　平　貞文

六四八　我のみやもえてきえなんよとゝもにおもひはなれぬふじのごと

返し　　きのめのと

六四九　ふじのねのもえわたるともいかがせんけちこそしらね水ならぬ身は（イかれぬ身の）

『平仲物語』第十一段

また、この男、人と物いふに、返りごとはするものから、あはで程経にければ、男、

①われのみや燃えて帰らむ世とともに思ひもならぬ富士の嶺（ね）ごと

女、返し

②富士の嶺のならぬ思ひも燃えば燃え神だに消たぬむなし煙を

また、男、返し

③神よりも君は消たなむたれによりなまし身の燃ゆる思ひぞ

また、女、返し

④かれぬ身を燃ゆと聞くともいかがせむ消（け）ちこそ知らぬ水ならねみづならぬ身は――下略――

とある。その他、『後撰和歌集』収載の貞文歌、及びこれと贈答関係にあるものは都合四組あるが、ことごとく『平仲物語』にはその存在を確認できない。

さて、右に引いたように、『後撰和歌集』と『平仲物語』では行文に小異あるはもとより、「きのめのと」の返歌は、『平仲物語』の②と③を混同して一首とするがごとき杜撰さを露呈している。三たび目加田さくを氏説を引くと、氏は結局、『後撰和歌集』・『大和物語』が『平仲物語』と直接交渉、すなわち書承関係をもたず、『平仲物語』の源泉は迂回することなく平貞文自筆の『貞文集』にまとめられたであろうという結論を導いて居られる。（『前掲書』参看）

そこでいま一つ臆測をたくましくすると、現存『平仲物語』の内、末段の補記を除いた部分は、おおよそ天歴（九四七―九五六）以前、すでに陽の当たらぬところで流布し、言い換えれば『伊勢物語』のような歌壇読者に人気を博し、読み継がれて筆写転々することなく、ひそかに読まれてきたのではなかろうか。そうすれば平貞文の卒した延長元年（九二三）『古今和歌集目録』『大和物語』など）から天歴五年（九五一）『後撰和歌集』撰進の年までの三十二年間、もし生前の平貞文に自撰の家集があったとしたならば、それは多分に現存本とさして違わぬものであったのではなかろうか。

それでは自撰にかかる「平貞文集」なるものが、『古今和歌集』の成立以前に成立していたか。もとよりそんなことは分るはずもないが、ただ、つぎのような仮説は、こころみにかかげて許されるのではないだろうか。

すなわち、平貞文の歌は、『古今和歌集』に八首（238 242 279 666 670 823 964 1033）を見るが、その内、六首がそれぞれ、

961――第一段、666――第九段、238――第十四段、823――第十八段、279――第十九段、247――第二十段――と、『平仲物語』に存し、内容的には相互に矛盾しない。ところが第十一段は、『後撰和歌集』では内容上の矛盾があり、どう考えても両者の書承影響関係は否定される。だがこの第十一段の「……女返し、富士の嶺のならぬ思ひも燃えば燃え神だに

NII-Electronic Library Service

Meisei University

消たぬむなしけぶりを」という歌は、『古今和歌集』(1023)に、「きのめのと」の歌として、「思ひに」の「に」の字が相異するのみでこれを載する。平貞文は『古今和歌集』撰進の際には未だ存命中であり、しかも撰者の忠岑、貫之、躬恒らとは「歌合」(「左兵衛佐定文朝臣」延喜五年四月廿六日)を催した間柄である。よって自然に『古今和歌集』の平貞文歌については、まずその信憑性の高さを肯定してよいと思うが、貞文の詠歌につけられた詞書は三首を数えるのみで、他と同様、簡略化されてしまっている。そのことは平貞文自身が『古今和歌集』のために体裁を考えて自撰したからであろう。自撰業平集や「原伊勢物語」は、作風はもとより、読者の受けとめ方が違っていたように思われる。

(三)

そこで、他の例に較べて異例に長大な詞書、すなわち業平歌の場合と在原業平集の歌とがいちじるしい対照をなすのは、つぎのような事情が胚胎したのではなかったかと推測される。すなわち、簡単に言えば、平貞文は存命中であり、在原業平は物故者だったという事実である。想像されうる一つの仮説的場面として、われわれはここに『古今和歌集』編纂実務の折、撰者たちが「原伊勢物語」あるいは「原中将集」の詞書の物語性に陶然となって、これを詞書らしく簡略化することを得ず、されば といって勅撰集という形式体裁をも一方では考慮せざるを得ず、その上、何よりも在五中将という燦然たる偶像と、そのこころ余りてことば足らずの破調の秀作を前にしてひたすら逡巡する姿である。

平貞文の詠歌は彼が存命中であったため、自撰して体裁を整えたと思われる故に『古今和歌集』・「貞文集」の先後は、もとより不明とは言うものの、現存『平仲物語』からみるに、両者はたがいに矛盾し合うことはなく、むしろきわめて近い関係にあったのではなかろうか。事実、『平仲物語』(末尾を除く)を読むと、作品に現われる人物の官位・事件を手がかりとして判明するものは、ことごとく『古今和歌集』以前(村瀬敏夫氏、延喜八・九年成立説「和歌文学研究」昭和・三二・四・十五)の世界であり、ことに貞文の青・壮年時代、すなわち寛平五年(八九四)から延喜十年(九一〇)までの事実を物語ったものであることなど、すでに論証されている。(目加田さくを氏『前掲書』他参看)。

そうすると、自撰平貞文集は平貞文生存期に成ったとみてよかろうが、この集にひょっとしたら在中将の「原伊勢物語」の影がつきまとってはいなかったであろうか。自明のことながら平貞文の出自・経歴は、『本朝皇胤紹運録』などによって見ると、桓武天皇――仲野親王――茂世王――平好風――平貞文と継次し、歴とした王統の貴公子である。かたや在原業平も同じく源を桓武帝に発し、平城天皇――阿保親王を父祖とする皇統譜につながる。極位は業平が従四位下(『三代実録』)、貞文が従五位上(『古今和歌集目録』)であり、両者相似の宮廷官僚である。さらに両人とも官界の秩序からはみ出て、歌と恋に生きた贅沢な男だが、貞文は業平の情熱的な性格を骨抜きにしたけしきで、所謂「放縦不拘」に徹することなどできない、終生乳離れのしない気弱なマザ・コンであり、大方他の貴族官僚と同じく官位に執着して止まない凡庸な男である。その女性への恋着ぶりは近代になって芥川龍之介の『好色』や谷崎潤一郎の『少将滋幹の母』の源泉ともなるべき猟奇的で愚かな近代的美しさをたたえている。しかも貞文は業平同様、貫之の知性と学才には及びもつかない。この二人の性格・経歴・習癖の相違がそのまま『伊勢物語』と『平仲物語』のそれと重なっている。また、この二人が共に藤氏擅権下

NII-Electronic Library Service

Meisei University

に生きた皇族でありながら、それぞれの作品の性格において際立った相違を見せるのは、業平の活躍したのが貞観期の六歌仙の時代であり、平仲のそれが寛平・延喜初年という時代の違いから、詠歌が総じて古典的声調に落ちつく頃である。さらにその間の藤原氏と天皇家の権力上の力関係の変化に原因すると言ってもよかろう。これは平凡な歴史上の事実である。

(四)

『平仲物語』開巻は、

いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり。先だちてよりいひける男は、官まさりて、その時の帝に近う仕うまつり、のちよりいひける男は、その同じ帝の母后の御あなすゑにて、官は劣りけり。されど、いかが思ひけむ、のちの人にぞつきにける。

かかれば、このはじめの男は、このもたりける男をぞ、いみじくあたみて、よろづのたいだいしきことを、もののをりごとに、帝のなめしと思すばかりのことをつくりいだしつつ、聞えそこなひけるあひだに、この男はた宮仕へをば苦しきことにして、ただ逍遥をのみして、衛府司にて、宮仕へも仕うまつらずといふことといできて、官とらせたまへば、世の中も思ひ憂じて、憂き世には交らはで、ひたみちに行ひにつきて、野にも山にも交りなむと思ひつれど、一寸をだに放たず、父母のいみじくかなしくしたまふ人なれば、憂きもこれぞ思ひさはりぬる……。

という風に筆は運ばれていく。この初段はある意味で『竹取物語』や『伊勢物語』の書き出しや、『伊勢物語』の初段を承けてその後に展開する物語文学の世界の導入部を決定するかに見える。『竹取物語』の女主人公の超現実性、『伊勢物語』の昔男の「いちはやきみやび」などとともに、『平仲物語』全体の基調音がここですでに聴かれるかのようである。以下若干の私見を述べてみたい。

まずこの物語の大体の骨格は、

(一) 宇多天皇親政下において、主人公の「男」が自分より官位の高い男と一人の女をあらそい、どうにかその女を手中におさめる。

(二) 敗れたライヴァルの男の中傷に(それは帝みずから「なめし」と思われるほどのものであった)、職務にたずさわる元気も喪失し、欠勤は日増しに重なり、ついに馘首。

(三) 憂悶遣る方なく、いっそ仏道修業に専念しようとするが、これも父母の反対に遭って踏み切れない。

右の(一)(二)(三)のストーリーを貫くのは、現代風に言い直せば、外にあっては上司、同僚、内にあっては父母と自分を取り巻くものに対して異常なまでに気弱で、無気力であるかのように描かれている。「女」を盗み出したり、また邪魔が入れば、「人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝ななむ」と詠み放って、傍若無人に猪突する『伊勢物語』の「昔男」の熱情はかけらも無い。「身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ」(『勢語』第九段)のような決然たる覚悟などとは無縁であるものの、この「男」はこの「男」なりに近代私小説的な「絶望」・「厭世」といった負の極にある。「男」はつぎのような台詞を吐く。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

「……心慰めに、東の方へまからむ」と「親に申しける」という次第である。

業平のごとき天衣無縫の性格とはうらはらに、詞藻においても格段の見劣りのする平貞文が、ここで紀貫之の『土佐日記』の発想（貫之が実際東下りしたか否か今は問うところではない。問題は慰安の場所として賜姓皇族の東国への志向が問題である）とはまた別な地点から、この先輩業平「昔男」の東下りに心ひかれている事実である。

このように考えると、自撰「貞文集」も「原伊勢物語」の形式や内容に何らかのかたちで影響を享けたと言いたいところだが、いかんせん「貞文集」などは、今日その実在を確認できない仮設のものであり、文献学の系統論としてそのような作品が予測可能であるにしても、「前稿」で「原伊勢物語」を現行『土佐日記』の創作心理、構想、修辞などから類推したような視点は、そもそもここでは許されないだろう。「原伊勢物語」も「自撰貞文集」も、無からは何も創造できないという、はなはだ西洋的にして名だたる格言を前提としているからである。

だがここには作品の本文を離れず、あくまで本文に即して立論されるかぎり、文献史学の実証性とは趣きを異にした、作品への一種のエロス的な接近がある。そこから必然的に帰納されてくるものは、学問としてはことごとく妄誕として嗤笑されであろう。だが、この妄誕には逆に読者の心情的理解を得るという不思議な体験的事実があるに違いない。それは文学作品に限って生じる抜き差しならぬ誤読である。その際、誤読は決まって歌に傾斜した叙情的散文において起こる。読者が『伊勢物語』から「現伊勢物語」（「自撰業平集」）、『平仲物語』から「貞文集」を予想せざるをえないのは、それぞれの歌と文章の真意を理解しようとするうちに、不可避的に各自思い思いの業平像、貞文像を追い求めているからである。テクストの正確な解読というより、読者は心情を抜きにしてはテクストに反応し、理解できないからである。

だが、先きに触れたように、現行『平仲物語』から末段を除いた三十一の話柄と仮設としての「貞文集」なるものは、何と言おうと時間的に距離が近く、かつ内容的にも夾雑物を予想し得ない理由を以って、現存『平仲物語』と『伊勢物語』の比較から、何らかの祖本のかたちくらい察知できるのではなかろうか。ここでもまた無からは何も生まれないという前提に立つ。ことにこの『物語』の初段で、すでに貞文自撰の作品は存在したのではないか、という予想がつぎのような事実から可能である。つまり、「男」の台詞が出てくる少し前に、やはりこの「男」が詠んだ歌で、

憂き世には門鎖（かどさ）せりとも見えなくになぞわが身のいでがてにする

というのがある。これは『古今和歌集』雑下、『拾遺和歌集』雑上に収載され、『古今和歌集』の詞書には、「つかさとけて侍りける時よめる」（「流布本」）とあって、あきらかに『平仲物語』の内容を踏まえている。しかも「筋切」（「佐理本」）では、意味は今一つ判然としないが、「…なむとてたちけるをおやのせちにとめ侍りければとまりてよめる」とあって、現存『平仲物語』の事実に近い。さらに「元永本」にも、「つかさとけて侍りける時人の国へまかりなんとていてたちけるおやのせちにとゝめ（待り）けれはとまりてよめる」とあり、この一条は『古今和歌集』が平貞文の実話、もしくは自撰「貞文集」の内容を資料として踏まえていたことを一層よく物語るものではなかろうか。そして「元永本」成立の

NII-Electronic Library Service

Meisei University

頃には平仲という男がいちじるしく戯画化されていたことを思うと、やはり私見といえども、ある程度の妥当性を期待してよいのではないだろうか。

(五)

官途むなしく、恋に不首尾の平貞文の心が「あづま」の方へかたむくのは、かならずや羨望するデカダンスの先輩歌人、在五中将業平の面影がちらついたからだと思う。当時の史的現実に、上総、常陸、上野の三国を、天長三年（八二六）九月六日以降、親王の任国とし、守を大守と称した事実があり（『類従三代格』）、律令制権の中枢から遠く後退した地域で、所詮、無用者の系譜につながる「貴種」の憧憬の方角であったことも考慮に入れるべきである。そして現行『平仲物語』の内容に関する限り、平貞文が「心慰めにあづまへ……」と言うのは、恋愛の不首尾、官を奪われたことの二点が契機になっているのであって、その限りにおいて、『伊勢物語』第六段の「芥川」の話から、第七段、第八段、第九段、第十一段……とつづく東国流浪の中での「恋の謫行吟」（「前稿」）に魅惑されていると思うのが、文学史的考察の上での自然のなりゆきではないだろうか。無論、『伊勢物語』と『平仲物語』とでは文体の格調、内容の切実さにおいてまったく異質ではあるものの、前者第六段の「むかしおとこありけり女のえうましかりけるをとしをへてよばひわたりけるを」と、後者における「いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり」という書き出しとは、まるっきり無関係だとして両者の書承関係を否定してしまうことは不可能であろう。後者については、在原業平自身のキャリアに即して諸説のあるところである。事の始まりは国史における記述の矛盾からである。すなわち、それまで無位だった業平の叙爵は良岑宗貞（遍昭）の出家の前年、喜祥二年春正月丙辰（八四九）で、位階は「従五位下」をもって初見とする（『続日本後紀』）。元慶四年（八八〇）五月二十八日辛巳の卒時から逆算すれば、二十五歳の時である。

しかるに、貞観四年（八六二）三月七日乙亥、業平三十八歳の時、ふたたび叙爵のことあって、「授二正六位上在原朝臣業平従五位上一」とある（『三代実録』）。従五位下から正六位下とあるのは降等である。一説に業平が二条后高子との私通のために、位一級下げられて東国に左降されたとある。また清和天皇の寵姫との私通を疑われ、常陸権介に左遷された藤原有貞の例もある（『三代実録』貞観十五年三月廿六日条）。岡一男氏によれば、「『三代実録』の一本には正六位となく、従五位下とあり、天福本『伊勢物語』勘物もまたそうある。流布本の『三代実録』の正六位上は好事家の改修だろう」（『古典と作家』参看）と推論されたのだが、業平は国史に見える第二回目の叙爵従五位上から以後順調（？）に累進して三年後は貞観七年三月九日己丑右馬頭に移り、四年経た十一年春正月己未、累加されて正五位下、さらに四年して十五年春正月丁卯従四位下に至り、同十七年春正月十三日丁酉近衛権中将となり、二年後の元慶元年十一月廿一日戊午、従四位上を授り、その翌年の春正月十一日丁未、相模権守兼右近衛中将となり、その翌年の三年十月蔵人頭（「職事補任」）、元慶四年春正月には美濃守を兼ね、そして同四年五月二十八日辛巳に卒となるから（以上『三代実録』）実際現地に赴任したかどうかは別問題として、官歴は切れ目なく連続的である。にもかかわらず、『続日本紀』の初見の二十五歳時の叙爵から二回目の貞観四年三月七日条の業平が三十八歳になるまでのまる十三年間――いわば彼の青春時代の位階官歴が国史にまったく無視されたのは何としても不可解である。すでに「前

NII-Electronic Library Service

Meisei University

稿」で触れたように、『伊勢物語』第九段の歌と詞章を温存しながら、これを詞書として収載している事実は、いかに業平の死後二十五年の歳月が流れたとはいえ、子息の棟梁などもいることであるし、父親の行状ぐらい承知していたと思われる。業平――「昔男」の東国における「恋の謫行吟」は虚実皮膜の間で、かなりのリヤリティをかちえていると言えよう。

ただ、『三代実録』の記述を流布本通りに読めば、同時にこれを正しいものとするならば、「原伊勢物語」の「東下り」の存在も、さきの官位剝奪を契機としている点で、『平仲物語』の「男」に符合している。換言すれば、「自撰貞文集」に「原伊勢物語」がすでに影を投げかけているという私見である。平貞文は在原業平と同じ理由で、東国への出奔を企てるが、実行には到らず、帝の母后を通して天皇に「人の国にも隠れ、山林にも入りぬべし云々」（「初段」）と愁訴し、復位を許される日を待ちわびるところに、先輩「昔男」業平の描き方との決定的な違いがある。ちなみに、貞文の父、平好風の叔母班子女王は宇多天皇の母后という関係にある。

(六)

『平仲物語』の「男」は、この男としては切実であったに違いない悲境にあって、ただ「心慰みに東の方へ」あこがれただけで、翌々年の司召には、「もとの官（つかさ）よりは、いますこしまさりたる」官位を賜わったというのである。

ところで、室町時代の伝東常縁筆『伊勢物語』はいわゆる定家本校訂「伊勢物語」証本のうち、最も信頼されるものの一つだとされるが（解説校異、山田清市氏、昭・三十四・武蔵野書院）、「昔男」の東下りの諸段の中に、平仲の名を記した勘物がある。すなわち、

もとより友とする人ひとり（平貞文紀有常）ふたりしていきけり（第九段）

むかしおとこ武蔵の国までまどひありきけり。さてその国に在る女をよばひけり。父はこと人（紀有常平貞文）にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける（第十段）

この勘物は中世の注釈の典型の一つで、史実に根拠なき妄誕ではあるが、それは近代合理主義の立場からの妄誕なのであって、平貞文は紀有常と共に東国に下ったこと、土地の女に「昔男」が求婚したとき、その父親は平貞文（ことびと）に婚わせようとしたが、母親は藤原氏の出で「あてなる人」ゆえに業平にと望んだ――という読み方、あるいは一つの解釈があったという事実がここでは面白いのである。平貞文は『平仲物語』の内容に関する限り、東国出奔の度胸はない。しかし中世の勘物の一つが業平・有常・平仲を東下りのグループに記名した事実は、業平と平仲の結びつき、あるいは「原伊勢物語」と自撰「貞文集」との親密性を考える上で、さまざまな連想を喚起する。

(七)

つぎに修辞・構想の面からでは、現存『平仲物語』における全体に「原伊勢物語」の影響があり――外面的類似であり、本質が相違することは、前稿「『土佐日記』との距離」で詳述した通りだが――すでに先

NII-Electronic Library Service

Meisei University

学の論じたところであるから、屋上屋を重ねないが、ただ『平仲物語』の「いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり……」という起筆について一言する。

『伊勢物語』では、単に「昔男ありけり」というのが一般で、「今は昔」という起筆とは異なる。南波浩氏によれば、「昔、昔者などが物語内容を時間的にただ過去の事として規定したのに対して、今は昔となると、作者の立っている現在の地点から、多少とも批判的反省的にとらえて語ろうとする姿勢である」（朝日古典全書『竹取物語』補註Ⅰ）、という解釈が正しい。

ところが、「今は昔」で始めれば、原則として、「とぞいひつたへたる」（『竹取物語』）、「……典侍は二百まで生けるとかや」（『落窪物語』「全書本」・「久老本」は「……とや」となる）、「……とぞ語り伝へたるとや」（『今昔物語』）と結ぶのが普通である。しかるに、『平仲物語』は「いまはむかし」と筆を起こしながら、「また、この男」（第二段）、「おなじ男」（第三段）、「また、このおなじ男」（第四段）、「また、この男」（第五段）と同じような書き出しを連続させ、最後まで変わらず、すなわち芸が無く、第三十八段の末尾は、「ようさり、いきて見るに、いとまがましくなむ」で終わっている。「まことや、檜隈川は……」という異例の書き出しを持つ、すなわち、後人の補記とみられる第三十九段も獲麟は女の返りごととなっている。このことから類推すると、『平仲物語』起筆の先蹤は、一見『竹取物語』的な発想、ひいては物語の語り出しのきまった形式として、現行大半の注釈が従ってはいるものの、『平仲物語』の内容は、あまりにも実録的、告白的、私小説的、心境小説的であるために、「今は昔」という物語の伝承的な意図を完全に裏切っている。つまり、爾余の三十七の小話における「またこの男」、「またこのおなじ男」という筆の返し方に対して、この「今は昔」という『竹取物語』的発想はまったく効果を持たない。『平仲物語』のこの書き出しは、明らかに『伊勢物語』の模倣たることをまぬかれない。「昔」を「この」に変えたに過ぎない。言い換えれば、『竹取』流の物語の伝承的形態をたちどころに放棄し、かつ「昔」を捨ててしまったところに、この作品の新しさがある。書き出しの文体によって喚起される『伊勢物語』の詠嘆的、喚情的、象徴的な「ひやび」の時空が、単に「男」とされて内省的にはなったものの、愚かな情念が淋しく綿々と綴られるのみである。

『平仲物語』には、『伊勢物語』にあるように、あるいは『竹取物語』にあるように、登場人物や出来事に対する一定の距離がなく、人間の喜怒哀楽を戯画化する能力が無い。一見深刻そうで、かなり濃密な心理描写をこころみ、いわゆる「すさび」の情緒をたたえた心境小説的な美学（目加田さくを『物語作家圏の研究―その位相及び教養よりみたる物語の形成―』第八章参看）を展開するものの、何より作者の精神の丈が低く、かつ現実描写から奔しる想像力が脆溺なために、却って読後の印象が稀薄である。すなわち反復して熟読するに堪えない。作者の意識が叙述すべき素材なり、体験なりに終始密着し、これに引きずられ、新しい世界へと誘われることがない。このことがおそらく『平仲物語』――ないし「自撰貞文集」なるものの時間的排列を雑纂的なものにしたと思われる。

(八)

平貞文と紀貫之は相携えて在五中将業平をそれぞれの文芸の先輩として、多分に偶像化していただろう。人は古今を問わず自分に真似の出来ないことをやってのける人を安易に崇拝するからである。ただ、文学に

NII-Electronic Library Service

Meisei University

おいて真似ることのできる唯一のものはその修辞、文体の域にとどまるであろう。前者は『伊勢物語』の「むかし男」に負けず劣らずの愛欲の生活を第三者として描く方法を継承し、後者は自分の過去の体験を時間の相において叙述し、散文につよく傾斜した「日記文芸」を新たに創造していったにもかかわらず、却って作者の学識がわざわいし、あるいはその臆病な知性のゆえに、概念的な叙述に終始しつつも、戯作者流の倒語、語戯、滑稽、諧謔の修辞、文体を継承したに過ぎない。平仲、貫之に共通するものは一にかかって「昔男」業平の秩序破壊への衝動である。どちらとも取れる曖昧模糊とした表現において、逆に文章の真意を理解させ、行間を読ませ、言外の意味を悟らせる技巧である。

貫之と貞文の交遊は延喜五年の貞文家歌合にあるように、かなり親密なものだったと思われるが、その時から平仲の卒年、すなわち延長元年九月廿七日（『古今和歌集目録』）まで、どの程度のものであったかは知るよしもない。『貫之集』にも――自撰・他撰の別なく――貞文との贈答歌は見あたらない。「原伊勢物語」・「貞文集」・『土佐日記』と次第していく自伝的作品の系列において、『平仲物語』よりも技巧・修辞において、さらに作者の情念の深さにおいて、別に物語的な歌日記を書いた女性がいる。すなわち、貞文とも交渉をもち、最初の勅撰集においても第一級の女流歌人として称揚される伊勢の御である。彼女の遺した『伊勢集』こそは、一読相似て相似ざる『平仲物語』の世界とは裏腹に、『伊勢物語』の時空に深くかかわっているようである。

以上の私見はあまりにも推論が多く、学問的には根拠を欠くものだとの批判を受けるであろう。事実、『伊勢物語』成立に関する先学の論考の主たるものを昭和三十年代から通読すると、それらの多くは文献学的に余りに正統であり、かつ正確に過ぎ、却ってその実証作業がフィクションの高みに達したかのような迫真性をもつ。だが、この『物語』の作者の意識の深奥にうごめく欲望や作品を成立させる行間とその空白の中に潜む放蕩不羈な欲情、辛辣な自己批判からくる真のユーモアのしわぶき、さらには「みやび」に収斂されていく洗練された純情感情の象徴的時空への耽溺など、初めから峻拒されているかに見える。そのことは次稿で、あらためて『伊勢集』を軸に、引きつづき行間の誤読、空白の多きに堪えながら、書き継ぎたい。（平成十一年十月八日記）

NII-Electronic Library Service